

NEWSLETTER

ハマ発ニュースレター

横浜都市発展記念館館報◎第32号

[特集]

企画展

「一枚の切符から昭和のあの頃へ」より

横浜の「記念きっぷ」黎明期



ご自由にお持ちください

[展示余話]

写真家、奥村泰宏・常盤とよ子夫妻と戦後社会事業

[資料紹介]

平成を振りかえる ～みなと点描 五十嵐英壽撮影写真より

横浜都市発展記念館

ハマ発 NEWSLETTER 第32号 2019(令和元)年7月13日発行(年2回発行・不定期)
編集/横浜都市発展記念館 発行/公益財団法人横浜市長官舎と歴史財団 〒221-0021 横浜市中区日本大通12 TEL.045(663)2424 FAX.045(663)2453
題字/ロゴ/高橋健介 印刷・製本/株式会社 佐藤印刷所 本誌からの無断転載を禁止します。

EXHIBITION

企画展のご案内



一枚の切符から昭和のあの頃へ

～思い出す横浜のイベント、ニッポンの風景

当館で所蔵する交通・観光関係の資料の中から、さまざまな記念きっぷを紹介し、都市横浜を舞台としたイベントをふり取り、また、日本各地の観光名所をめぐる。昭和のあの頃のなつかしい出来事や思い出の場所を探してみてください。

【会期】2019(令和元)年7月13日(土)～9月23日(月・祝)

【図録】『一枚の切符から昭和のあの頃へ』

横浜都市発展記念館 / 編

寄贈・寄託資料の紹介

平成30年9月から令和元年6月までに受贈した資料です。(敬称略)

寄贈資料名	点数	寄贈者
社団法人日本厚生団・ボーイズホーム関係資料	132	(福)福光会 子どもの園
2002FIFAワールドカップ横浜開催関係資料	41	小松富一
伊藤正平氏旧蔵国鉄関係資料等	151	伊藤多恵子
磯部伸樹氏関係資料(一括)	44	磯部伸樹
伊藤正平氏旧蔵国鉄関係資料等(続)	34	伊藤多恵子
記念切手および記念切符	9	長瀬雅子
市原隆夫旧蔵中村順平関係資料	45	市原徹
芝幸夫氏撮影戦後横浜風景写真	73	芝さより
川崎貯蓄銀行創立五十年記念「世直福神」	1	松尾佐知子
横浜博覧会(YES' 89)横浜館制服	6	小谷恵美子



●表紙図版 「横浜市電車バス並貿易復興記念券」1947(昭和22)年、ほか

MUSEUM SHOP

ミュージアム・ショップより

刊行物

- 『奥村泰宏・常盤とよ子写真展 戦後横浜に生きる』①
横浜開港資料館・横浜都市発展記念館 / 編 定価1,400円+税
- 『伸びる鉄道、広がる道路 横浜をめぐる交通網』②
横浜都市発展記念館 / 編 定価1,600円+税
- 『ウォーターフロント・シティ横浜 みなとみらいの誕生』③
横浜都市発展記念館 / 編 定価1,000円+税

『目で見る「都市横浜」のあゆみ』
横浜都市発展記念館 / 編 定価1,239円+税

DVD

「映像でたどる昭和の横浜」シリーズ
定価各1,429円+税

- 第1巻・港とまちづくり
- 第2巻・都市の交通
- 第3巻・子どもたち



① 奥村泰宏・常盤とよ子写真展 戦後横浜に生きる



② 伸びる鉄道、広がる道路 横浜をめぐる交通網



③ ウォーターフロント・シティ横浜 みなとみらいの誕生

横浜都市発展記念館 利用案内

■開館時間

午前9時30分～午後5時
2019.8/10, 9/14は午後7時まで
(券売は閉館30分前まで)

■休館日

毎週月曜日・年末年始ほか
(月曜日が祝日の場合は開館、翌平日に休館します。)

■観覧料

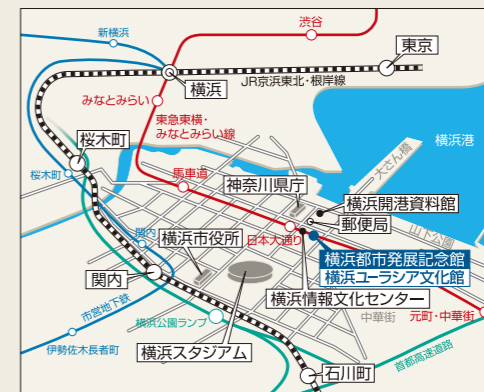
上記企画展開催期間
企画展 一般300円 小・中学生150円
(企画展の入館券で常設展もご覧いただけます。)
常設展のみ 一般200円 小・中学生100円
それ以外の期間

常設展のみ 一般200円 小・中学生100円

- 毎週土曜日は小・中・高校生無料
- 「濱ともカード」「障害者手帳」「愛の手帳(療育手帳)」などをお持ちの方は、無料です。

■ホームページ

<http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/>



交通アクセス

- 東急東横・みなとみらい線日本大通り駅(3番出口)0分
- 横浜市営地下鉄関内駅(1番出口)から徒歩約10分
- J R 京浜東北・根岸線関内駅(南口)から徒歩約10分
- 横浜市営バス「日本大通り駅前」下車徒歩1分
- あかいづつバス「日本大通り」下車徒歩1分

※本誌は当館ホームページでもご覧いただけます。



編集後記

今号は令和改元後、最初の号になります。改元によって昭和時代が遠くなるような錯覚を覚えますが、当館では引き続きこの時代にスポットを当て、様々なテーマを掘り下げてゆきます。今回の企画展では「切符」という資料に着目して昭和の地域史を見つめなおします。是非ご来館いただければ幸いです。(西)

◎次号発行予定 令和2年1月頃



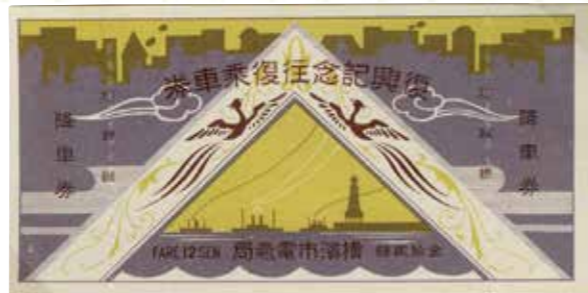
企画展「二枚の切符から昭和のあの頃へ」より 横浜の「記念きっぷ」黎明期



①「大典記念乗車券」
1915(大正4)年／(横浜電気鉄道発行)／長谷川弘和氏旧蔵



②「車橋山元町間電車開通記念乗車券」
1928(昭和3)年／横浜市電気局発行／長谷川弘和氏旧蔵



③「復興記念往復乗車券」
1929(昭和4)年／横浜市電気局発行／長谷川弘和氏旧蔵



④「皇太子殿下御降誕奉祝記念乗車券」
1933(昭和8)年／横浜市電気局発行／芳賀洋子氏寄贈

切符とは、賃金や料金が支払い済みであることを証明する紙片のことです。「切符」という言葉は江戸時代以前からありますが、明治時代に創業した鉄道の用語に取り入れられると、やがて広く一般に定着しました。わかりやすく「きっぷ」あるいは「キップ」と表記されることも多くなりました。交通機関をはじめ、施設や会場への入場の際にもこの言葉が用いられ、また、「甲子園への切符を手にする」など、目的地への到達を約束する証という意味の比喩的な表現も生まれます。

昭和時代になると、そんな切符に絵や図形、後には写真を加えた、いわゆる「記念きっぷ」が盛んに発行されます。戦前は主に皇室・軍事関係の行事や、博覧会、祭事などの開催を記念して、大都市の市電がおこなわれました。そして戦後は、市電や私鉄はもちろんです、その主役となったのが国鉄(日本国有鉄道、現在のJR)です。鉄道そのものに関するもの、他、観光名所や自然の景観、その地域の行事やイベントに関するものなど、数多くの記念きっぷを発行しました。プームの

全国で四番目とされています。横浜電気鉄道はその後の1921(大正10)年に市営化され、横浜市電となりました。関東大震災(1923年)を経た1928(昭和3)年、車橋・山元町間に新線が開通した際に記念きっぷを発行しました(②)。これは式典に出席した来賓に贈呈されたものです。翌年には、横浜市が震災からの復興祝賀式を開催するにあわせ、復興を象徴する絵柄の記念きっぷ30万枚を発行し、販売します(③)。これらが横浜市電として最初の記念きっぷでした。

1933(昭和8)年には皇太子(現在の上皇)の生誕を祝う記念きっぷが発行されました(④)。この皇室の大きな出来事にもない、東京や名古屋の市電でもその発行はおこなわれています。その後1935(昭和10)年、復興記念横浜大博覧会が横浜市の主催で山下公園において開催されました。この昭和戦前期を代表する横浜の都市イベントに際して、横浜市電は三度にわたって記念きっぷを発行しています(⑤はその一つ)。その図案はいずれも公募によるものでした。さらに開港記念祭(1937年、38年、⑥)、そして紀元2600年記念行事(1940年)など、都市あるいは都市と関わる国家のイベントに際して、次々と発行していきま

す。市電を運営した横浜市電気局は、「乗客奉仕」の一つとして「全市的に行はれた

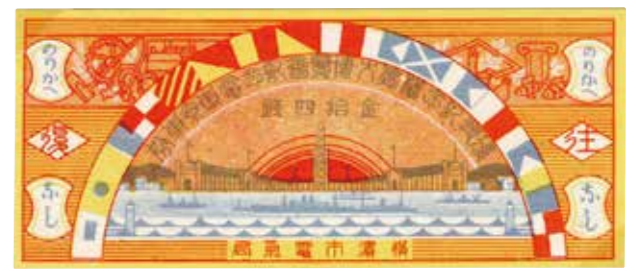
過熱が問題になった時期もありますが、その発行は今日の事業者にも受け継がれています。

さて、この特集では、横浜という都市に関する記念きっぷについて、その始まりを紹介したいと思います。記念きっぷは、切手や紙幣のように発行の主体が限定されておらず、発行の記録が残されているわけでもありません。今回の企画展の展示資料の多くは長谷川弘和氏の収集したのですが、同氏の著書「乗車券でつづる70年の歴史」(1972年)、『鉄道記念キップ』(1980年)によると、東京都電の前身である東京市街鉄道が1905(明治38)年、満州軍総司令部の凱旋を記念して発行したものが日本で最初の記念きっぷです。1912(大正1)年には大阪と京都の市電が明治天皇の崩御にあたり特別の切符を発行しました。そして、1915(大正4)年、横浜市電の前身となる横浜電気鉄道は正天皇の大典を記念する絵入りの切符を発行します(①)。これが横浜で最初の記念きっぷで、その定義にもよりますが、

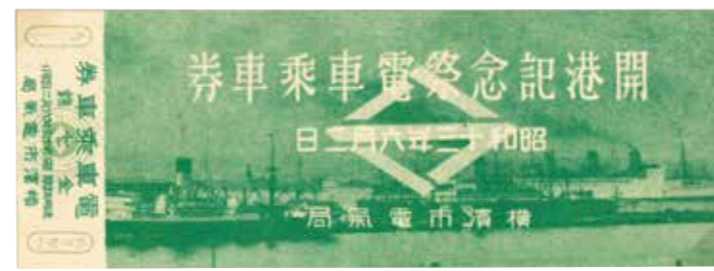
特別なる行事或ひは記念すべき行事に際して記念乗車券を発行し乗客の記念物として贈った(『電気局事業誌』1940年)としています。私たちは記念きっぷを通じて、もちろん限りはありますが、横浜という都市で営まれたイベントの歴史のいったんを伺うことができるのではないのでしょうか。

なお、戦前の国鉄(省線)や私鉄では、特に横浜における事象を対象にした記念きっぷは発行していません。ただ、「京浜電気鉄道全線開通記念」と題する絵葉書が残されています(⑦)。京浜電気鉄道は現在の京急電鉄の前身で、1905(明治38)年に品川(現北品川)・神奈川間の路線を全通させました。その翌年に多摩川の橋りょうが付け替えられ、開通記念の式典が実施されました。これはその際に発行されたものです。実はこの絵葉書は切符としての役割も兼ねていたようです。スタンプが押さ

れていて、「大師穴守回遊切符 税共金三十五銭 明治四十年一月二十一日」とあります。記念の



⑤「復興記念横浜大博覧会記念乗車券」
1935(昭和10)年／横浜市電気局発行／芳賀洋子氏寄贈



⑥「開港記念祭電車乗車券」
1938(昭和13)年／横浜市電気局発行／長谷川弘和氏旧蔵



⑦「京浜電気鉄道株式会社全線開通記念」絵葉書
1906(明治39)年／(京浜電気鉄道株式会社発行)

回遊乗車券だったことがわかります。さらに「此切符御持ち帰り御随意」とあります。黎明期にあった非常にユニークな例として、これも記念きっぷに加えてよいかもしれません。(岡田直)

*表記は「切符」および「記念きっぷ」とします。
*多くの場合、横浜市電と同時に横浜市営バスの記念きっぷも発行されますが、本特集では割愛します。
*図はいずれも当館の所蔵資料です。

展示余話

写真家、奥村泰宏・常盤とよ子



1 日本厚生団設立のボーイズホームと診療所
1950 (昭和25)年頃 奥村泰宏撮影



2 婦人更生施設の朝
1957 (昭和32)年 常盤とよ子撮影



3 施設で座学を受ける女性たち
1957 (昭和32)年 常盤とよ子撮影



4 施設の部屋でくつろぐ女性たち
1957 (昭和32)年 常盤とよ子撮影

* 4～5頁掲載の写真はすべて栗林阿裕子氏寄贈・当館所蔵

常盤とよ子が撮影した 婦人更生施設

常盤とよ子(1928―)は、1956(昭和31)年に銀座で開催した個展「働く女性」が高い評価を受け、戦後女性写真家を代表する一人として注目を集めることになる。一連の作品の中で最も注目を集めたのは、戦後横浜に存在した赤線で働く売春女性たちを撮影した「赤線地帯」シリーズで、女性の視点で彼女たちの姿を捉えた作品群は、多くの人々の心を打つものとして高く評価された。この個展ののち、常盤は彼女たちの実態により深く迫るため、婦人更生施設の女性たちの撮影を試みる。

戦後の横浜では、多くの占領軍が駐留していたために、彼らを相手に商売をする女性たちの数も多く、全国に先駆けてその保護事業がすすめられていた。神奈川県では1946(昭和21)年12月に全国初となる常設の売春女性の保護更正施設、川崎白菊寮が川崎市に開設され、その後、横浜市南区三春台にむつみ寮、磯子区に若草寮が設置される。また、1947(昭和22)年に設置された性病専門の県立屏風ヶ浦病院内に、全国初の常設の婦人相談所である神奈川県婦人更正相談所が開設された。本相談所は当初、売春女性のみを対象としていたが、1952(昭和27)年12月に対象を生活困窮者や家

出者などに広げ、横浜駅東口前に移転して、より多くの女性たちの保護を担った。これら神奈川県での実践は評価され、売春防止法第34条における婦人相談所設置義務化に大きく影響したとされる。常盤が婦人更生施設の撮影を開始したのは、売春防止法施行が完全施行される直前の1957年(昭和32)で、厚生省からの紹介状を手に市内の施設を訪れた。この際、施設長は常盤に「特に、あの女の子たちが、こういう収容所から世の中へ、再び出て行ったときに、世の人たちも、自分たちと少しも違ってない人間なんだ、ということを知ってもらいたいと思うのです。」と述べて歓迎し、

施設を自由に撮影することが許可された。施設を撮影した作品のうち、特に注目できるのが、朝から晩まで彼女たちに密着し、その姿を捉えた作品群である。施設では5時半起床であったため、常盤はそれより前に施設に入り、彼女たちの洗顔の様子をカメラに収めた(2)。その後、食事や座学(3)、職業訓練の様子などに加え、自由時間や就寝時の様子(4)にとらえた作品を生み出した。この後も、常盤は幾日も施設を訪れて彼女たちと交流し、親しくなることにより、その境遇を把握し、生き生きとした表情を捉えている。これらの作品を展示する際には、プライバシー保護の観点などから外部より批判の声もでたというが、被写体である彼女たちから、「更生をした自分たちに恥じることはないから写真を展示してほしい」という要望があったという。

一連の作品は、戦後の神奈川県における初期の婦人保護事業史の貴重な資料として他に例を見ないものであるといえる。施設に入所した女性たちの境遇については、神奈川県婦人更正相談所が作成した克明な記録が神奈川県立公文書館に保存されているため、これらの資料とともに写真の整理・分析をすすめていきたいと考える。(文中敬称略)

(西村 健)

昨年開催した企画展「奥村泰宏・常盤とよ子写真展 戦後横浜に生きる」(10月6日～12月24日)では戦後横浜の諸相を数多く撮影した写真家、奥村泰宏・常盤とよ子夫妻の写真を展示するとともに、関係する歴史資料を展示した。このうち、夫妻が戦争孤児や「混血孤児」、売春女性など、弱い立場の人々に目を向けた作品群は特に注目を集め、好評を得た。本稿では、夫妻と戦後社会事業のかかわりについて言及したい。

奥村泰宏と 戦後社会事業

奥村泰宏(1914―1995)は、戦後横浜を代表する写真家の一人であるとともに、戦後横浜の社会事業史に名前を残す著名な社会事業家でもあった。奥村は、横浜の老舗燃料商、奥村商会の家に生まれ、裕福な家庭環境で幼少期を過ごしたが、大学時代は左翼演劇に傾倒するなど、社会問題に深い関心をもつ青年であった。大学入学当初は文学で身を立てることを希望していたが、政府による左翼演劇の弾圧を受けてこれを断念し、家業に専念することとなる。

その後奥村は、1945(昭和20)年5月29日の横浜大空襲で戦災者となり、家業も統制を受けて活動が制限されたため、戦後直後から社会事業の世界に身を投じることになる。この間の経緯については、

1988(昭和63)年に発行された『季刊 横浜学』第一号に掲載された奥村の講演録「占領下の市民生活」に詳細が記されている。ここには、奥村が戦時中に石原寛爾中将を指導者とする「東亜連盟」という組織に属しており、同連盟の神奈川県支部長であった福田忠光(元神奈川県商工課長)と懇意であったために、戦後、福田が東亜連盟のメンバーを中心に設立した「横浜市戦災者同盟」(以下、同盟)に参加することになった経緯が記されている。同盟は福田が理事長で、奥村が副理事長を務めたが、当初、まだ32歳で社会事業活動の経験のない奥村は、副理事長就任を固辞したという。しかし、福田は奥村の「坊ちゃん的なキャラクター」と戦災者であることが、同盟の看板としてふさわしいと考えたことに加え、「これからの社会事業は、むしろ素人のなかからいい人がやるべきで、社会事業に玄人意識などおかし」という思いを伝え、奥村は副理事長職を全うすることを決意する。同盟は従来の篤志家による慈善事業型ではない社会事業の形を目指し、セツルメント方式で営利事業を経営していく方針で次々に戦争被害者向けの事業に乗り出してゆく。同盟の事業は、戦災者向けに安価な食事を提供する「関内食堂」の開設、公定価格で日用品を配給する同盟員専門の共同市場

の開設、戦災者向け住宅の供給、戦争孤児の保護など多岐にわたり、多くの戦争被害者を救済することになった。同盟は1947(昭和22)年に社団法人化して「日本厚生団」と改組し、より活動を充実させてゆく。その事業は戦後日本の発展とともに役割を終えたものもあるが、戦争孤児保護施設のボーイズホームは現在、児童養護施設「社会福祉法人福光会子ども園」として、茅ヶ崎市で横浜の子どものための保護を行っているほか、1948(昭和23)年に貧窮者向けの医療施設として同団が中区日ノ出町に設立した診療所は、緑区長津田の「一般社団法人日本厚生団長津田厚生総合病院」へと発展して現在も地域医療への貢献を果たしている(1)。戦後、福田や奥村が築いた社会事業の成果は、現在の横浜における社会福祉事業の原点のひとつであったといえよう。奥村はこの時期の活動を「生涯のうちで最も多忙な年月」であったと記しており、社会事業に奔走した経験が、その後に撮影した写真のテーマに大きく影響したことを回想している。奥村は1949(昭和24)年に家業に戻るが、終身日本厚生団の理事を務めており、社会の影の部分に目を向けた作品を生み出し続けた。奥村写真をより深く理解するには、この時期の活動を知ることが不可欠であるといえるだろう。

平成を振りかえる 〜みなと点描

2019年5月1日、「平成」から「令和」へと時代が変わりました。当館では、この大きな時代の節目にあたり、1989年から30年続いた横浜の「平成」を、五十嵐英壽氏が撮影したみなと点描の風景で振りかえる五十嵐英壽写真展「平成を振りかえる〜みなと点描」(会場…1階ギャラリー)を企画しました。

横浜にとって「平成」とは、横浜ベイブリッジの開通に始まり、横浜ランドマークタワーの誕生、赤レンガパークの整備と、横浜を象徴するみなとの景観が作り出された時代でした。ここでは写真展に出品した作品から10点をセレクトして紹介します。

(青木 祐介)



⑦ みなとみらい夜景
平成13(2001)年12月23日

万国橋からの夜景。平成9(1997)年にみなとみらい21地区は、国土交通省による「都市景観100選」に選ばれた。



⑤ 旧横浜港駅プラットホーム
平成7(1995)年9月19日

新港ふ頭内に設けられていた横浜港駅のプラットホーム。昭和3(1928)年に建設され、東京駅からの汽船連絡列車がこのホームに乗り入れた。横浜港駅は昭和57(1982)年に廃止されるが、プラットホームは平成8(1996)年に屋根を復元して整備された。



④ 港一号橋梁
平成6(1994)年7月24日

桜木町駅前から新港ふ頭へと向かう臨港貨物線の線路跡に残る橋梁。明治40(1907)年のアメリカンブリッジ社製。線路跡は歩行者用のプロムナードとして整備され、平成9(1997)年に「自動車道」として開通した。



① 赤レンガ倉庫 平成元(1989)年3月19日

新港ふ頭内の保税倉庫として建設された2棟の煉瓦造倉庫は、平成元(1989)年に倉庫としての役目を終えた。横浜市は平成4(1992)年に倉庫の土地と建物を国から取得すると、再生に向けた改修工事に着手した。平成14(2002)年4月、2棟の倉庫は商業・文化施設「横浜赤レンガ倉庫」としてオープンした。



③ 赤灯台
平成14(2002)年4月21日

関東大震災後の第3期築港工事で建設された外防波堤の赤灯台。防波堤の突端に赤白2基が設置された。初点灯は昭和10(1935)年4月。現在、防波堤の大部分は本牧ふ頭と大黒ふ頭に取り込まれているが、赤灯台の位置は当初から変わっていない。



⑥ 旧税関事務所遺構と赤レンガ倉庫 平成10(1998)年10月11日

手前は、大正3(1914)年に建設された煉瓦造3階建ての税関事務所の遺構。関東大震災で被災したのち、跡地は長いあいだ荷捌き地として利用されていた。平成6(1994)年に赤レンガパークの整備中に遺構が発見され、花壇として整備された。

⑩ 開国博Y150 平成21(2009)年4月19日

開港から150年目にあたる平成21(2009)年には、横浜開港150周年記念テーマイベント「開国博Y150」がおこなわれた。フランスの巨大スペクタクルアート劇団「ラ・マシ」によるパフォーマンスが話題を呼んだ(写真はプレイベントの様子)。



⑨ 整備中の象の鼻地区と横浜税関
平成20(2008)年9月26日

開港150周年に向けて、整備がすすむ象の鼻地区。象の鼻防波堤の整備工事で、幕末の築造当時とみられる石積み護岸が発見され、現地で保存されることになった。



② 横浜博覧会(YES'89)会場 平成元(1989)年3月20日

平成元(1989)年、市政100周年・開港130周年記念事業として、整備中のみなとみらい21地区を会場として、横浜博覧会(Yokohama Exotic Showcase'89)が開催された。中央左には博覧会にあわせて開館した横浜美術館が、手前には旧横浜船渠第1号ドックに係留されている日本丸の姿が見える。



③ 横浜ベイブリッジ 平成元(1989)年12月20日

昭和40(1965)年に発表された横浜の六大事業のひとつ「ベイブリッジ」は、構想から四半世紀を経て、平成元(1989)年11月に開通した。手前が大黒ふ頭。奥に見えるみなとみらい21地区は整備中で、横浜ランドマークタワーの姿はまだない。